

# 創造者の存在を指し示す宇宙的微調整と言語としての DNA

Greatchain

2019/07/08

「科学の反乱」 Science Uprising などという運動が、なぜ起こるのか？ これは起こるべくして起こったものである。先日の記事の David Klinghoffer は、これは「暴政」に対して起こったもので、その言い方は決して誇張でないと言っている。これは一般人に関係のない科学者間の争いなどではなく、人間そのものを巻き込んだもので、それは我々全員に向って、「立ち上がれ、これはお前自身の危機だ」と言っている。なぜなら、もしあなたが、この宇宙から偶然に生じた、何の意味も価値もない存在で、それが冷徹なる科学的真理であるとするなら、あなたに人間の尊厳などというものはなく、殺されても文句は言えないからだ。

いま、個人の尊厳だけでなく、国家の尊厳、共同社会とその生活環境の尊厳までが、世界的に踏みにじられつつある。この「暴政」の張本人はおそらく、同じ特定の権力集団である。彼らは、個人の尊厳でも、その最も貴重な魂を支配しようとしている。これが、巧妙な進化論教育による愚民教育であることはすでに述べた。ダーウィンという多大の影響を及ぼした人物を、単なる一生物学者の名として認識する人は、世界の知識人の間にほとんどいないだろう。それはダーウィニズムという、弱肉強食的な、人間を侮蔑する思想、科学としてはエセ科学、哲学としては、支配者にとって非常に都合な根拠を与えるものとして、認識されている。ダーウィン自身は、半ば以上利用されたとはいえ、この名を純粋な、偉い昔の生物学者であるかのように、幼い子どもに思い込ませることは、狡猾な権力集団の策略としか考えられない。

20 世紀から今日に至るまでの戦争や流血で、ダーウィニズムが根底になかったものは、ほとんどないだろう。第一次・二次大戦から、ロシア革命、ヒトラー、マルクス主義の階級闘争、スターリン、毛沢東、に至るまで、ダーウィニズムの生存闘争哲学が、戦争や殺しの大義名分にならなかったものはないだろう。問題は、今日に至って、それが捨てられたかと言えば、それどころか、ますます無遠慮に行われるようになったことである。強い者によるホロコーストやジェノサイド、他国の主権侵害は、当然の権利のように行われ、これを咎める者はわずかしかない。

「他国の主権の侵害が当然のように行われている」誰の目にも見える例は、わが国では、ケ

ムトレイル散布である。Dane Wigington の毎日のように行われる警告の、昨日聞いた演説にあった言葉を、私は書き留めておいた——「暴政者と彼らに仕える臆病者たち…人間の無気力と人間の傲慢の縮図…これまでのすべての暴政の形態で、これを凌ぐものはない…」今、これがアメリカでは少しずつ、ウィギントン氏（正真正銘の英雄）を中心に、「反乱」として拡大している。

「科学の反乱」も、科学の「暴政とそれに仕える臆病者たち」の、神に逆らう傲慢さに対して、ついに目覚めたものである。同じパターンの反乱がそこでは起こっている。また、この傲慢さは、権力者の侵略で言えば、ここに載せたアンドレ・ヴルチェクの先日の記事で言えば、今まで彼らは、侵略を隠そうとしたのに、「最近では隠そうとさえしなくなった」ことに現れている。

一方、インテリジェンス（またはデザイン、すなわち神の働き）の存在の発見を、どうしても認められず、宇宙はダーウィン進化論で説明できることにせよ、とおそらく烈火のごとく怒って命令する「暴政者と彼らに仕える臆病者たち」が、ここにもいることは間違いない。彼らにとっては、神など存在しないことを民衆に叩き込むことほど、重要なことはない。その民衆の人口を大幅に減らす許可を、彼ら自身から得る必要があるからである。また、民衆がこれまでの眠りから目覚めて、本当は神が存在することに気づくことほど、恐ろしいことはない。なぜなら、彼らの長年のアジェンダは、神の創造したものの一切を破壊し、中でも最も貴重な人間を劣化させ、墮落させて、魂を奪って、それによって神に勝利することだからである。——そのように理解するなら、今起こっている一切の理不尽な動き（たとえばケムトレイル、無意味な戦争、ペドフィリアなど）が、なぜ行われるか理解できるだろう。また本来、「科学と宗教の対立」など存在せず、（常識的で温厚で有望な）有神論科学と（暴政的で傲慢で希望のない）無神論科学の対立だけが、存在していることがわかる。これが今、頭の混乱している若い人々を教育するのに、最も重要なことである。

この「科学の反乱」運動で、今のところ最も活躍しているのは、*Signature in the Cell: DNA and the Evidence of Intelligent Design*（細胞の中の署名：DNA とインテリジェント・デザインの証明）の著者 Stephen Meyer であるように見える。この本は大著でかつ難しいので、今、創造者の存在証明として、最も手っ取り早く、わかり易いのは、Lee Strobel という人の Why Does Creation Make Sense? という 47 分の名講義ではなかろうか（英語字幕しかないが）？ この人はジャーナリストだが、的確な知識をもち、何より、かつて完全な無神論者だったが、完全に逆の立場になったところが頼もしい。彼は講義中、同じように無神論から完全にひっくり返った、有名な哲学者 Anthony Flew の例を出している。

マイヤー氏の主張は、DNA が単に機械装置でなく、情報を発する言語であるということに

尽きる。言語は、唯物論によって説明できるものではない。創造者の意志が細胞の中に書き込まれているとしか考えられない。もう一つは、宇宙的微調整 Cosmic Fine Tuning と呼ばれる事実である。我々の生きているこの宇宙の、あらゆる物理法則や、その常数は、我々を産み出し生かすように、最初から絶妙に微調整されていた。例えば重力法則とその常数が、ごくわずかにでも違っていたら、我々はここにいなかった。この宇宙は、その物理的条件の一つひとつが、我々の存在とその生命環境からの、完全な逆算によって構成されていた。我々が偶然この世界に生まれてきた可能性などない。我々の一人ひとりが、神の願いによって生み出されていた。これは感動的な事実である。このかつて無神論者だった演者ストローベル氏は、最後に祈りを捧げている。そして会場は2階席まで満席になっている。私はかつてこの事実を、親鸞の「弥陀の五劫思惟（しゆい）の願をよくよく按ずれば、ひとえに親鸞一人（いちにん）がためなりけり」という感動的な言葉に喩えたことがある。